



## 主イイススハリストスの神現祭聖体礼儀

譜面中、五線譜上に **||o||** とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞(祈祷文)が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないようにしてください。

2025年1月9日 一部改訂  
釧路管轄司祭ステファン内田圭一

※ 下の歌「早課第九歌頌イルモス」を歌える場合は聖変化後の「常に福にして」に替えて歌う。

わ が た ま し い や て ん ぐ ん よ  
我 靈 天 軍

り と う と き ど う て い ぢ よ  
尊 童 貞 女

し じょ う な る しょ う しん ぢ よ  
至 淨 生 神 女

を あ が め ほ め よ  
崇 讚

しょ う しん ぢ よ や なん ぢ の く ら い に か な い て よ く  
生 神 女 爾 位 適 能

な なん ぢ を さ ん び す る の し た な し  
爾 讚 美 舌

て ん じょ う の ち え も い か に なん ぢ を か しょ う す る  
天 上 智 慧 如 何 爾 歌 誦

を し ら ず た だ なん ぢ じ ん じ の も の と し て  
知 唯 爾 仁 慈 者

わ れ ら の し ん を う け た ま え わ れ ら の ね っ  
我 等 信 受 給 え 我 等 熱

せ つ な る あ い を し れ ば な り け だ し  
切 愛 知 蓋

な なん ぢ は ハ リ ス テ ア ニ ン ら の て ん た つ な り  
爾 等 転 達



※【 神現祭領聖詞 ティト書 2:11-14、3:4-7 】



句) <sup>かみ おんちょう しゅうじん すくい ほどこ もの あらわ われら ふけいけん せぞく よく はな</sup> 神の恩寵、衆人に救を施す者は現れて、我等に、不敬虔と世俗の慾とを離れ

て、<sup>みづか せい ぎ けいけん もつ いま よ いのち わた</sup> 自ら制し、義と敬虔とを以て今の世に生を度り、

句) <sup>のぞ ところ ふく およ おおい かみ われら きゅうしゅ こうえい あらわれ ま</sup> 望む所の福、及び大なる神、我等の救主イイススハリストスの光榮の現を待つ

ことを教う。

句) <sup>かれ われら ため おのれ あた われら およそ ふほう あがな おのれ ため えら</sup> 彼は我等の爲に己を與えたり、我等を凡の不法より贖いて、己の爲に選ばれた

る民、<sup>たみ ぜんこう ねつしん もの きよ ため</sup> 善行に熱心なる者を潔めん爲なり。

句) <sup>しか われら きゅうしゅかみ おんちょう じんあい あらわ とき</sup> 然れども我等の救主神の恩寵と仁愛との顯れし時、

句) <sup>かれ われら おこな ところ ぎ わぎ よ あら すなわちおのれ じれん よ ちょうせい せん</sup> 彼は我等が行いし所の義の功に由るに非ず、乃己の慈憐に由りて、重生の洗、

<sup>およ せいしん ふくしん もつ われら すく</sup> 及び聖神の復新を以て、我等を救えり。

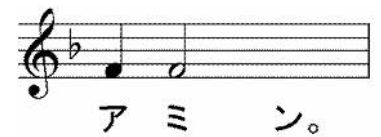
句) <sup>せいしん すなわちかみこれ われら きゅうしゅ よ ゆたか われら そそ</sup> 聖神は、即神之をイイススハリストス我等の救主に由りて、豊に我等に注げり、

<sup>われら かれ おんちょう もつ ぎ のぞみ したが えいえん いのち よつぎ な ため</sup> 我等が彼の恩寵を以て義とせられて、望に循いて、永遠の生命の嗣と爲らん爲なり。

【 聖体礼儀の開始 】

司祭) ( 黙誦：天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者  
 よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を  
 もるもろ けがれ いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま い たか  
 諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。至と高き  
 こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ い たか こうえいかみ  
 は光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高きには光榮神に  
 き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ しゅ わ くちびる ひら しか わ  
 歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、主よ、我が唇を啓けよ、然せば我  
 くち なんぢ さんび あ  
 が口は爾の讚美を揚げんとす、 )

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世々に、



【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏る心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス

よ ほさいしょく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん ため しゅ いの  
トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



司祭) わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの  
我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



司祭) こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こうち おもの ため しゅ いの  
此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



司祭) きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの  
氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



司祭) こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あもの とりこ もの およ  
航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び  
かれら すくい ため しゅ いの  
彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの  
我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、



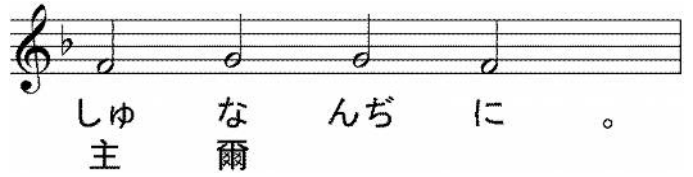
司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



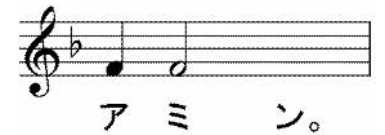
司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限

な じんあい い がた もと しゅさい なんぢ じれん よ みづか われら こ  
り無く、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の

せいどう かえり われらおよ われら とも いの もの なんぢ ゆたか おんたく なんぢ  
聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩澤と爾の

あいれん ほどこ たま  
愛憐とを施し給え、 )

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



アンティフォン  
【 第一 倡 和 詞 第 113 聖 詠 】

イズライリ エギプトよりいで、イアコフのいえいほうみん  
出 家 異 邦 民

よりいでしとき、  
出 時

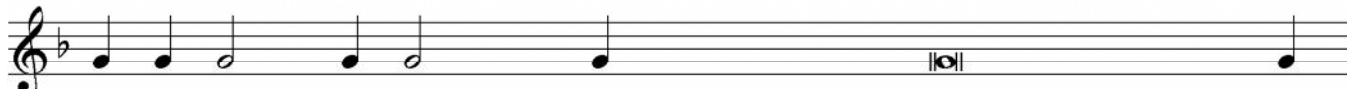
きゅうせいしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因

われらをすくいたまえ。  
我 等 救 給

イウダはかみのせいしよとなり、イズライリはそのりよ  
神 聖 所 其 領



うちとなれり。  
地



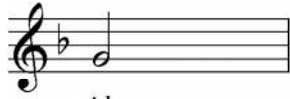
きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて  
救世主 生神女 祈禱 因



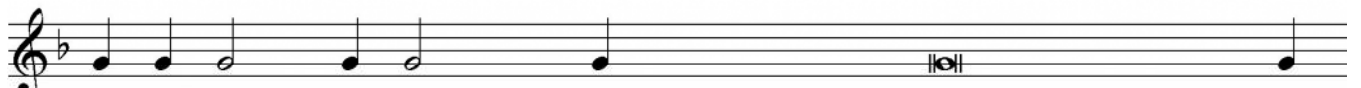
われらをすくいたまえ。  
我等 救 給



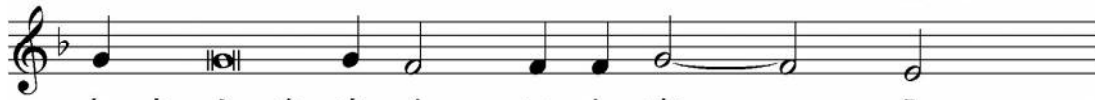
うみはみてはしり、イェルダンはあとへしりぞけ  
海 見 走 後 退



り。



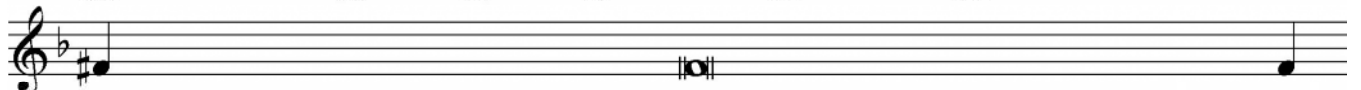
きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて  
救世主 生神女 祈禱 因



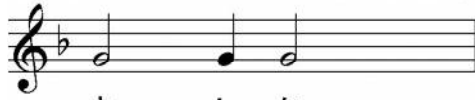
われらをすくいたまえ。  
我等 救 給



うみよ、なんぢなにごとにあいてはしりしか、  
海 爾 何 事 遭 走



イェルダンよ、なんぢなにごとにあいてあとへしりぞ  
爾 何 事 遭 後 退



きしか。



きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによりて  
救世主 生神女 祈禱 因



われらをすくいたまえ。  
我等 救 給

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
何 時 世 世

き ゅ う せ い し ゅ よ 、 し ょ う し ん ぢ ょ の き と う に よ り て  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因

わ れ ら を す く い た ま え 。  
我 等 救 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ <sup>しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) かみ <sup>なんぢ おんちやう もつ</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、われら <sup>たす すく あわれ まも</sup> 我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。  
主 憐

司祭) しせいしけつ <sup>いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup> 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん <sup>きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup> 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち <sup>もつ かみ いたく</sup> 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

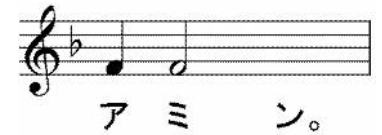
司祭) ( 黙誦：しゅわ <sup>かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎやう ふく くだ なんぢ きやうかい</sup> 主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

じゆうまん <sup>まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから</sup> の充満を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力

もつ <sup>かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか</sup> を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、 )



司祭) けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ  
蓋 權柄 及び國と權能と光榮は 爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 アンティフォン 第二 倡 和 詞 第 114 聖 詠 】



われよろこぶ、しゆのわがこえ、わがいのりを  
我喜主我聲我祈  
ききしによる。  
ききしによる。  
ｲﾀﾞﾝにせんをうけしかみのこよ、われら等  
洗受神子我等  
なんぢにアイルイヤをうたうものをすくい  
爾 歌 者 救  
た ま 給 え。  
た ま 給 え。  
かれはそのみみをわれにかたぶけたり、ゆえ  
故 彼 其 耳 我 傾 故  
にわれざいせいのひにかれをよばん。  
我 在 世 日 彼 呼  
ｲﾀﾞﾝにせんをうけしかみのこよ、われら等  
洗受神子我等  
なんぢにアイルイヤをうたうものをすくい  
爾 歌 者 救

たまえ。

しのやまいはわれをかこみ、ぢごくのくるし  
死病我を困地獄の苦し

みはわれにのぞみ、そのときわれしゆのなをよ呼  
我臨其時我主名呼

べり。

バルンにせんをうけしかみのこよ、われら等  
洗受神子我等

なんぢにアイルイヤをうたうものをすくい  
爾歌者救い

たまえ。

しゆはじんじにしてぎなり、わがかみはじれんな  
主仁慈義我神慈憐

り。

バルンにせんをうけしかみのこよ、われら等  
洗受神子我等

なんぢにアイルイヤをうたうものをすくい  
爾歌者救い

たまえ。

【 神の獨生の子 】

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
 何 時 世 世

か み の ど く せ い の こ な ら び に こ と ば よ 、  
 神 の 獨 生 子 並 言

し せ ぎ る も の に し て わ れ ら を す く わ ん が た め  
 死 者 我 等 救 爲

あ ま ん じ て せ い な る し ょ う し ん ぢ ょ ・ え い て い ど う ぢ ょ  
 甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マ リ ヤ よ り み を と り 、 か み の せ い を か え  
 身 取 神 性 易

ず し て ひ と と な り じ ゅ う じ か に く ぎ う た れ 、  
 人 十 字 架 釘

し を も っ て し を ふ み や ぶ り し ハ イ ス ト ス か み よ 、  
 死 以 死 踏 破 神

せ い さ ん し ゃ の い つ と し て ち ち と せ い し ん と と  
 聖 三 者 一 父 聖 神 共

も に さ ん え い せ ら る る の し ゅ よ 、 わ れ ら を す 救  
 讚 榮 主

く い た ま え 。  
 給

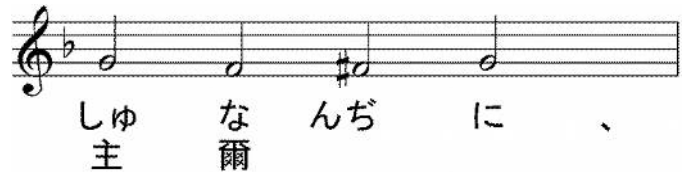
【 小聯禱 】

司祭) <sup>われらまたまたあんわ しゅ いの</sup> 我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

<sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup>  
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、  
<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup>  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の  
<sup>いのち もつ かみ いたく</sup>  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦: <sup>われら こ こうどうわごう きとう たま かつ にさんにんなんぢ な よ あつ もの</sup> 我等に此の共同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者に

<sup>そのもと ところ たま やく しゅ なんぢみづか いま なんぢ しょぼく ねがい その</sup>  
も其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を其  
<sup>りえき ため かな われら こんせ なんぢ しんり し らいせ えいえん</sup>  
利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世には永遠の  
<sup>いのち え たま</sup>  
生命を得るを給え、 )

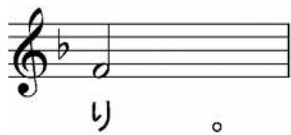
司祭) <sup>けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま</sup> 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も

<sup>いつ よよ</sup>  
何時も世に、



【 第三倡 和 詞 第117聖詠 】





り。



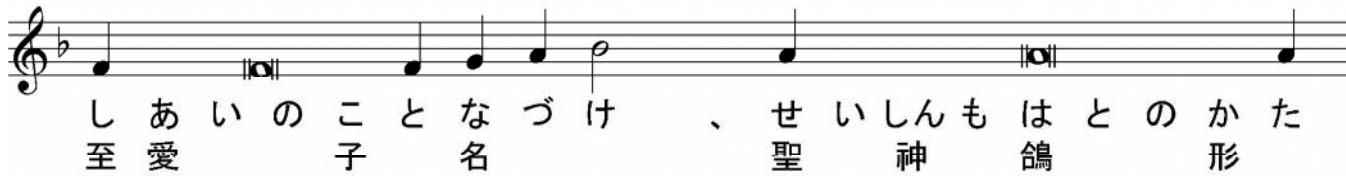
しゅよ、なんぢがイェルダンにせんをうくると時  
主 爾 洗 受 と 時



き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた  
聖 三者 敬 拜 顯



り、けだしちちのこえなんぢをしょうして  
蓋 父 聲 爾 證



しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた  
至 愛 子 名 聖 神 鳩 形



ちにあらわれてことばのたしかなるをしめ  
顯 言 確 示



せり、あらわ れてせかいをてらし  
現 世界 照



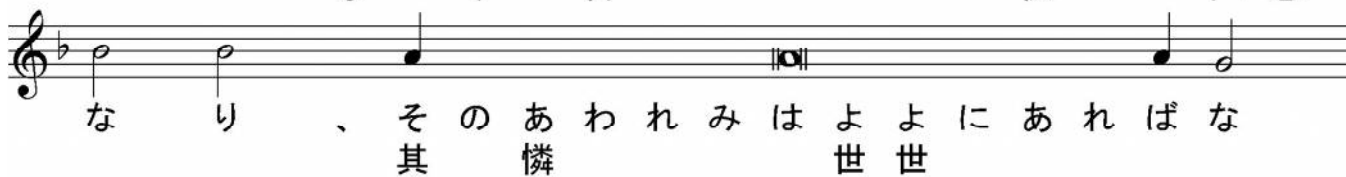
しハリストスかみよ、こうえいはなんぢにき  
神 光 榮 爾 歸



す。



イズライリのいえいまいうべし、かれはじんじ  
家 今 言 彼 仁慈



なり、そのあわれみはよよにあればな  
其 憐 世 世



り。

しゅよ、なんぢがイェルダンにせんをうくると時  
 主 爾 洗 受 時

き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた  
 聖 三者 敬 拜 顯

り、けだしちちのこえなんぢをしょうして  
 蓋 父 聲 爾 證

しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた  
 至愛 子 名 聖 神 鳩 形

ちにあらわれてことばのたしかなるをしめ  
 顯 言 確 示

せり、あらわ れてせかいをてらし  
 現 世界 照

しハリストスカみよ、こうえいはなんぢにき  
 神 光 榮 爾 歸

す。

アーロンのいえいまいうべし、かれはじんじな  
 家 今 言 彼 仁慈

り、そのあわれみはよよにあればなり。  
 其 憐 世 世

しゅよ、なんぢがイェルダンにせんをうくると時  
 主 爾 洗 受 時

き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた  
 聖 三者 敬 拜 顯

り、けだしちちのこえ なんぢをしょうして  
蓋 父 聲 爾 證

しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた  
至愛 子 名 聖 神 鳩 形

ちにあらわれてことばのたしかなるをしめ  
顯 言 確 示

せり、あらわ れてせかいをてらし  
現 世界 照

しハリストスカみよ、こうえいはなんぢにき  
神 光 榮 爾 歸

す。

しゅをおそるるものいまいうべし、かれは  
主 畏 者 今 言 彼

じんじなり、そのあわれみはよよにあれば  
仁慈 其 憐 世 世

なり。

しゅよ、なんぢがバプティスマンにせんをうくると時  
主 爾 洗 受 時

き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた  
聖 三者 敬 拜 顯

り、けだしちちのこえ なんぢをしょうして  
蓋 父 聲 爾 證

しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた  
 至愛の子名 聖神 鳩の形  
 ちにあらわれてことばのたしかなるをしめ  
 顯言 確 示  
 せり、あらわ れてせかいをてらし  
 現 世界 照  
 しハリストスかみよ、こうえいはなんぢにき  
 神 光 榮 爾 歸  
 す。

司祭) ( 黙誦：主宰・主・我等の神、諸天に天使及び、天使首の品級と軍隊とを立て  
 て爾が光榮の奉事者となしし者よ、求む我等の入るに伴いて、彼の我等と  
 ともつとともなんぢしぜんさんえいせいてんしらいいたたまけだしおよ  
 偕に務め、共に爾の至善を讚榮する聖天使等の入るを致させ給え、蓋、凡  
 そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、 )

司祭) 睿智、肅みて立て、

【 聖入の句 】

しゆのなによりてきたるものはあがめほ  
 主名依 来者 崇 讚  
 めらる、われらしゆのいえよりなんぢ  
 我等主 家 爾  
 をしゆくふくす。しゆはかみなりわれらをて  
 祝 福 主 神 我 等 照



らせり。

【 神現祭のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢが御ダシにせんをうくると  
主 爾 洗 受 時

き、せいさんしゃのけいはいはあらわれた  
聖 三者 敬 拜 顯 現

り、けだしちちのこえなんぢをしょうして  
蓋 父 聲 爾 證

しあいのことなづけ、せいしんもはとのかた  
至 愛 子 名 聖 神 鳩 形

ちにあらわれてことばのたしかなるをしめ  
顯 言 確 示

せり、あらわ れてせかいをてらし  
現 世界 照

しハリストスカみよ、こうえいはなんぢにき  
神 光 榮 爾 歸

す。

【 神現祭のコンダク 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにき  
光 榮 父 子 聖 神 歸

す、



い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
今 何 時 世 世

しゅよ、なんぢはこんにちせかいにあらわ  
主 爾 今日 世界 現

れ、なんぢのひかりはわれらにしるされた  
爾 光 我 等 印

り、われらなんぢをうけみとめてう歌  
我 等 爾 承 認 歌

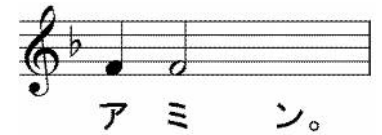
た う。ちかづきがたきひかりよ、  
近 難 光

なんぢきたりなんぢあらわれたまえり。  
爾 來 爾 現 給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい  
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい  
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの  
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ  
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいしょう  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
しんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ  
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も、世世

に、



【 聖三祝文に代えて 】

ハリストスにおいて せんをうけ しもの ハリストスを  
於 洗 受 者  
きたり、アリル イヤ、ハリストスにおい  
衣 於  
て せんをうけ しもの ハリストスをきたり、  
洗 受 者 衣  
アリル イヤ、ハリストスにおいて せんをう  
於 洗 受  
け しもの ハリストスをきたり、アリル  
者 衣  
イヤ、こうえいはちちとことせいしんにき  
光 榮 父 子 聖 神 歸  
す、いまもいつもよよに、アミン。  
今 何時 世世  
ハリストスをきたり、アリル イヤ。  
衣  
ハリストスにおいて せんをうけ しもの  
於 洗 受 者



ハリス ト スを き た り 、 ア リ ル イ ヤ 。

衣

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅ な よ き もの あが ほ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ざ もの なんぢ そのくに</sup>ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ</sup>の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 <sup>プロキメン</sup> 提綱 神現祭の 第4調 】

司祭) <sup>つつし き しゅうじん へいあん</sup>慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup>爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>しゅ な よ き もの あが ほ しゅ かみ われら てら</sup>プロキメン、主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、主は神なり我等を照せり、



しゅの な によ り て き た る も の は あ が め ほ め ら  
主 名 依 來 者 崇 讃

る 。 しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 。

主 神 我 等 照

誦經) <sup>しゅ さんえい けだしかれ じんじ そのあわれみ よよ</sup>主を讚榮せよ、蓋彼は仁慈にして、其憐は世にあればなり、

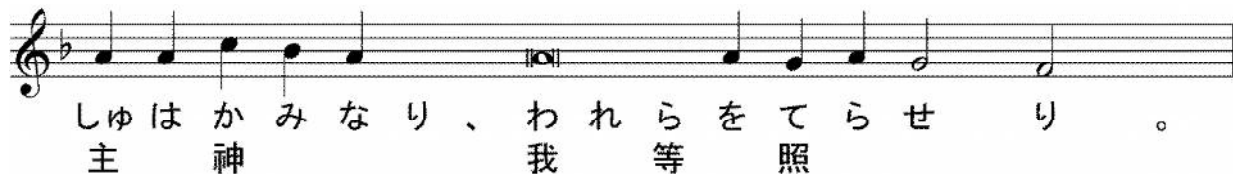


しゅの な によ り て き た る も の は あ が め ほ め ら  
主 名 依 來 者 崇 讃

る 。 しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 。

主 神 我 等 照

誦經) <sup>しゅ な よ き もの あが ほ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 。

主 神 我 等 照

【 <sup>アポストロス</sup> 使徒經 テイト書 302端 2章11~14節、3章4~7節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがティトに達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 子ティトよ、神の恩寵、衆人に救を施す者は現れて、我等に不敬虔と世俗の  
愆とを離れて、自ら制し、義と敬虔とを以て今の世に生を度り、望む所の福、及  
び大なる神、我等の救主イイススハリストスの光榮の現を待つことを教う。彼は  
我等の爲に己を與えたり、我等を凡の不法より贖いて、己の爲に選ばれたる民  
善行に熱心なる者を潔めん爲なり。然れども我等の救主神の恩寵と仁愛との  
顯れし時、彼は我等が行いし所の義の功に由るに非ず、乃己の慈憐に由りて、  
重生の洗、及び聖神の復新を以て、我等を救えり、聖神は即神之をイイス  
スハリストス我等の救主に由りて、豊に我等に注げり、我等が彼の恩寵を以て義とせ  
られて、望に循いて、永遠の生命の嗣と爲らん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 子テトスよ、すべての人を救う神の恵みが現れた。そして、わたしたちを導き、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深くこの世で生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大なる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにはほかならない。ところが、わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが現れたとき、わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。この聖霊は、わたしたちの救主イエス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた。これは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされ、永遠のいのちを望むことによって、御国をつぐ者となるためである。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 神現祭の 第4調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>かみ しよし しゅ けん こうえい ぞんき しゅ けん</sup> 神の諸子よ主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) <sup>しゅ こえ みず うえ あ こうえい かみ とどろ しゅ たすい うえ あ</sup> 主の聲は水の上に在り、光榮の神は轟けり、主は多水の上に在り、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、  
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ</sup> 人を愛する主宰や、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が  
<sup>しねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく</sup> 思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる  
<sup>いましめ おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ</sup> 誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜  
<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神  
<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> や、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善  
<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 6端 3章13~17節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup> 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ<sup>でん</sup>傳<sup>せいふくいんけい</sup>の聖福音<sup>よみ</sup>經の讀、



司祭) 謹<sup>つつし</sup>みて聽<sup>き</sup>くべし、彼の<sup>か</sup>時<sup>とき</sup>、イイスガリレヤよりイオルダン<sup>きた</sup>に來り、イオアンに<sup>つ</sup>就きて、之<sup>これ</sup>

より洗<sup>せん</sup>を受けんと欲<sup>ほつ</sup>す。イオアン彼<sup>かれ</sup>を止めて曰<sup>とど</sup>く、我<sup>いわ</sup>爾<sup>われなんぢ</sup>より洗<sup>せん</sup>を受くべきに、爾<sup>なんぢわれ</sup>我に

就<sup>つ</sup>くか。イイス答<sup>こた</sup>えて彼<sup>かれ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、今<sup>いま</sup>姑<sup>しばら</sup>く許<sup>ゆる</sup>せ、蓋<sup>けだし</sup>我等<sup>われら</sup>は是<sup>か</sup>くの如<sup>ごと</sup>く凡<sup>およそ</sup>の義<sup>ぎ</sup>を盡<sup>つく</sup>す

べし。是<sup>ここ</sup>に於<sup>おい</sup>て之<sup>これ</sup>を許<sup>ゆる</sup>せり。イイス洗<sup>せん</sup>を受けて、直<sup>ただち</sup>に水<sup>みず</sup>より上<sup>あが</sup>れるに、視<sup>み</sup>よ、天<sup>てん</sup>彼の<sup>かれ</sup>

爲<sup>ため</sup>に開<sup>ひら</sup>け、神<sup>かみ</sup>の神<sup>しん</sup>鳩<sup>はと</sup>の如<sup>ごと</sup>く降<sup>くだ</sup>りて、其<sup>その</sup>上<sup>うえ</sup>に臨<sup>のぞ</sup>むを見<sup>み</sup>たり、且<sup>かつ</sup>天<sup>てん</sup>より聲<sup>こえ</sup>ありて云<sup>い</sup>う、之<sup>これ</sup>

は我<sup>われ</sup>の至<sup>し</sup>愛<sup>あい</sup>の子<sup>こ</sup>、我<sup>わ</sup>が喜<sup>よろこ</sup>べる者<sup>もの</sup>なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、ヨハネのところに来て、バプテスマを受けようと言われた。ところがヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った、「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたがわたしのところにおいてになるのですか」。しかし、イエスは答えて言われた、「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」。そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がった。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上へ下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があつて言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

\*\*\*\*\*



※聖体礼儀③ へ